市長座談会

地域の魅力を増す「屋外型芸術祭」

中野 五郎（なかの ごろう）
臼杵市長（大分県）

大西 秀人（おおにし ひでと）
高松市長（香川県）

小出 譲治（こいで じょうじ）
市原市長（千葉県）

牛越 徹（うしこし とおる）
大町市長（長野県）

司会・コーディネーター
井上 繁（いのうえ しげる）
日本経済新聞社元論説委員

その土地固有の地域資源の魅力を、アートを媒介としながら掘り起こし、内外に発信する「屋外型芸術祭」。アートの創造性を地域振興につなげる取り組みとして注目を集めています。近年は多くの来場者を集める人気の芸術祭も増え、全国的にも広がりを見せています。

座談会では屋外型芸術祭を開催する牛越・大町市長、小出・市原市長、大西・高松市長、中野・臼杵市長にお集まりいただき、それぞれの開催の経緯や各芸術祭の特徴、開催の効果、財源確保の問題などについて、幅広くお話しいただきました。

（本文中の役職名・敬称は一部省略しています）

アートによって地域資源に光

井上　近年、屋内を中心にした芸術祭とは一線を画し、その地域固有の風土や環境を存分に生かした屋外型芸術祭が各地で盛んに開催されるようになりました。観光の促進、文化振興、出展作家と住民との交流、都市の知名度の向上など、さまざまな効果が指摘されています。

少子高齢化、人口減少の課題解決に向けて芸術祭を開催。市の魅力の発信とともに、地域経済の活性化につなげたい。

牛越 徹
大町市長（長野県）

まず、各市長に屋外型芸術祭を開催した経緯や、それぞれの芸術祭の特徴についてお聞かせいただきたいと思います。

牛越　大町市は北アルプスの山麓に位置する、清冽（せいれつ）な雪解け水と澄んだ空気、四季折々の景観に恵まれたまちです。一方で、近年は少子高齢化、人口減少が進んでおり、その対策として平成24年からほかに先んじて移住・定住の促進、子育て支援、産業振興などに取り組んできました。その結果、現在は転出超過にブレーキが掛かり始めていますが、さらなる地域再生に向けて、市を挙げて取り組んだのが、この6月4日から開催している「北アルプス国際芸術祭2017」です。

大町市は従来から、四季を通じて楽しめる山岳観光都市として、年間300万人もの観光客を集めていますが、この芸術祭を契機に、市の魅力をさらに国内外に発信するとともに、来訪者と市民との交流を深めることで、より一層周遊型・滞在型の観光を促進し、地域経済の活性化につなげていきたいと考えています。

この芸術祭に向けて、14カ国から36組の作家を招へいし、豊かな自然、文化、人々の営みなどを生かした、多彩な芸術作品を5つのエリアで展示しています。3年前に小規模なアートイベントを開催したことがあるものの、本格的な芸術祭は初めてですので、まずは2万人の集客を目標としていますが、既に海外からを含め、多くの皆さんに本市を訪れていただいています。

小出　市原市は臨海部に工業地域が広がり、北部地域は首都圏のベッドタウンとして発展した反面、里山や緑豊かな自然が残る南部地域は、過疎高齢化が急速に進んでいるという課題を抱えています。まさに「日本の縮図」ともいえる都市ですが、アートによって地域資源に光を当て、南部地域の活性化につなげようと、2回目となる「いちはらアート×ミックス」を開催しました。

第1回は市制施行50周年の記念事業として、プロのアーティストの作品展示を中心に実施しましたが、今回は、市民参加型の芸術祭にシフトチェンジしようと、アーティスト以外にも地元住民の作品発表の場として、「地域プロジェクト」を設けました。また作品展示だけでなく、体験型のワークショップも多数開催しました。

開催エリアとしては、養老渓谷をはじめとする豊かな里山を舞台に、廃校となった小学校や小湊鐵道（こみなとてつどう）の里山トロッコ列車など、魅力ある地域資源も積極的に活用しました。都心から1時間という好立地の強みも生かしながら、そうした資源を現代アートと融合させることで大きな

ニコライ・ポリスキーによる竹の構造体「Bamboo Waves」（大町市）
（写真／大糸タイムス提供）

芸術祭を契機とし、都心や空港から1時間の立地性を活かし、地域とともに世界に誇れる里山づくりに取り組んで行きたい。

小出 譲治
市原市長（千葉県）

相乗効果を生み、現在、集計中ですが、前回を超えるようなお客さまにお越しいただくことができたと感じています。

大西　瀬戸内海に浮かぶ島々や高松港などを会場に、２０１０年から関係機関や周辺自治体と連携して「瀬戸内国際芸術祭」を開催しています。日本で最初の国立公園に指定された瀬戸内海の島と海の魅力を発信することで、「海の復権」と「地域の活性化」を目指したアートプロジェクトです。

３年に１回開催のトリエンナーレ方式を採用していますが、２０１０年の第１回の来場者数は94万人、２０１３年の第２回は１０７万人、昨年の第３回は１０４万人と、来訪者が高水準で維持されているのも、この芸術祭の特徴の一つです。

また、海外の都市との間で高松空港との直行便が増えていることもあって、第３回の外国人来訪者の数は全体の13・４％。前回に比べて、実に10ポイント以上増加したほか、昨年度の外国人宿泊者数の対前年伸び率は47都道府県で香川県がナンバーワンになりました。さらに日本銀行高松支店ではこの第３回の芸術祭による香川県内での経済波及効果を１３９億円と推計するなど、目に見えて効果が表れています。

同時に高松市では全国に先駆けて、芸術分野に高い知識を有するアーティストを「芸術士」として、保育所・こども園・幼稚園に派遣する、「芸術士派遣事業」も実施。芸術祭をきっかけにして、さまざまな効果が地域にもたらされています。

中野　臼杵はキリシタン大名として知られる大友宗麟（そうりん）が１５５６年に築城した臼杵城の城下町として発展したまちです。城を中心に商家が建ち並び、その外側を武家屋敷や寺院が取り囲むように形成される独特な町並みが特徴で、その町割りは江戸初期以来、変わることなく、現在でもそのまま残っています。

「うすき竹宵（たけよい）」は、毎年、11月の第１土・日の２日間開かれます。１㎞四方に及ぶ歴史的町並みを、竹を使って作ったぼんぼりやオブジェの灯りで幻想的に照らし出す、地域イベントです。

鉄道保線員のかつての詰所小屋を苔と山野草で覆った木村崇人の作品「森ラジオ ステーション」（市原市）（写真／中村脩）

臼杵の資源である歴史的な町並み、そして日本有数の竹の産地である特質を生かした地域の祭りを、それまで大きな催しがなかった秋に開催しようと、平成９年から開始しました。回を重ねるごとに規模が大きくなり、昨年訪れた人の数は約11万人、設置されたぼんぼりの数も約２万本に及びました。今ではすっかり秋の臼杵の風物詩になっています。

自治会や事業所、小・中・高校、大学など、さまざまな団体がオブジェの制作などに携わってくれているほか、多くのボランティアが祭りを支えています。

ボランティアの力をいかに確保するか

井上　今、中野市長からご指摘があったように、芸術祭をサポートするボランティアをいかに確保するか、という点も大きな課題でしょう。この点について、各都市の取り組みをお話しくだ

さい。

牛越　私たちの芸術祭も、市民参加を軸にしたところに大きな特徴があります。市内外からボランティアサポーターに登録いただいた方は500人を超えたほか、多くの市民や行政機関、団体や企業が協働して、作品制作等の準備や開催期間中の運営などを担っていただいています。

小出　第2回の「いちはらアート×ミックス」を支えたボランティア等の数は約1300人に及びました。例えば、今回、菜の花が咲き誇る中を、里山トロッコ列車が走る光景が話題を呼びましたが、その沿線に菜の花の種をまく作業も、市民自らが行いました。また、市内中学生がウェルカム・ボードを制作するなど、市内の子どもたちにも、来訪者へのおもてなしに一役買ってもらいました。

大西　大地の芸術祭の「こへび隊」を参考に、瀬戸内国際芸術祭では、作品制作のお手伝い、芸術祭のPR、期間中の運営、各島での催しのお手伝いなどを担うボランティアサポーターとして「こえび隊」を結成しています。昨年の第3回では延べ約7000人がボランティアとして、芸術祭を支えてくださいました。

中野　毎年、約8000本の孟宗竹（もうそうちく）の切り出し作業や、使用するロウソク2万本の調達・寄贈なども、市民や民間団体が担ってくれています。実際、いろいろな役割を担う市民がいなければ、祭りは成り立ちません。

井上　近年は、2年に1回のビエンナーレ、3年に1回のトリエンナーレなど、数年に一度の周期で開催する芸術祭が増えています。各都市のお立場から、そのメリットや率直なご意見などをお聞かせいただきたいと思います。

大西　2010年の第1回が成功したことで、毎年開催すべきではないかとの意見が出たことも事実です。しかし、次回の企画立案、芸術作品の制作、ボランティアの募集など、一連の作業を毎年繰り返すのは容易ではありません。ある程度間を置かないとイベント自体が陳腐化してしまう危険性もあります。

牛越　同感です。私どもの芸術祭の開催に当たっては、3年前に実行委員会を設置し、市内の60もの団体が参画する形で準備を進めてきましたが、アーティストの選定、サポーターの仕組みづくりなど、調整することが多く、かなり目まぐるしい日々を過ごしました。やはり3年に1度の開催がふさわしいと実感しています。

小出　その反面、地域にアートイベントを根付かせ、住民のモチベーションを維持するためには、継続的に取り組むことも必要です。その意味で、市原市では「いちはらアート×ミックス」を開催しない年も、春と秋の2回にわたって、小規模なイベントを小まめに開催してきました。

大西　私たちも、瀬戸内国際芸術祭が開催されない年でも、恒久作品の展示などを行っています。回を重ねるごとに、作品自体が充実してきていますので、たとえ会期中でなくても、多くの観光客を集めています。

多くの人が詰めかける男木港。左に見えるのは、ジャウメ・プレンサのアート作品「男木島の魂」（高松市）

芸術祭の開催によって、瀬戸内海の島と海の魅力を発信することで、「海の復権」と「地域の活性化」を目指しています。

大西 秀人
高松市長（香川県）

伝統的な町並みを竹ぼんぼりの幻想的な光が包む「うすき竹宵」（臼杵市）

中野　リピーター率の高いことが「うすき竹宵」の特徴で、祭りに併せて毎年のように臼杵市にお越しいただいている観光客も少なくありません。そうした流れを断ち切らないためにも、私どもとしては毎年開催することが重要だと考えています。かなり忙しいですが、例年、5月の中旬に実行委員会を立ち上げて、それぞれの役割分担を決めながら、本番に向けて準備を進めています。

芸術祭がもたらすさまざまな効果

井上　屋外型芸術祭を開催して、各都市ではどのような効果が見られたのか、あるいは今後、いかなる効果を見込んでいるのか、お話しいただければと思います。

牛越　現在開催中ですので、効果を検証する段階ではありませんが、芸術祭への参画を通じて、自分たちのふるさとの良さに気づき、地域に誇りを持っていただく。それが地域を支える人づくりにつながることを期待しています。併せて「信濃大町」の認知度を向上させ、地域ブランド化を図っていきたいと思います。

大西　多くの人が島を訪れ、島の風土や環境が高く評価されることで、自分たちの地域の良さを誇りに思う市民が増えるなど、「シビックプライド」の醸成につながっています。同時に、芸術祭を通じ、観光地としての知名度が上がってくるにつれて、国際会議の誘致など、MICE振興の分野でも成果が出ています。

中野 五郎
臼杵市長（大分県）

市民が祭りに参加することで、市民の一体感、連帯意識が育つとともに、愛郷心の醸成にもつながっています。

中野　市民が祭りに参加することで、市民の一体感、連帯意識が育ってきていますね。さらに、自分たちがかかわった祭りに、多くの人が足を運んでくれるようになると、自分たちのまちの良さを再評価するようになる。愛郷心の醸成にもつながっています。

　また、祭り期間中は、値が張る特産のフグ料理を楽しみにされる方も少なくありません。提供する店舗も繁忙を迎え、相当な経済効果が出ています。

牛越　「北アルプス国際芸術祭」は、アートだけでなく、「食」の祭典という側面もあります。地域の飲食店のご協力の下、「タイアップレストラン」として地元の食材を用いた特製メニューを提供いただいたり、地元の人気店60店を網羅した「自慢の一品」の取り組みを進めたことで、地域の食文化の磨き上げにもつながりました。

小出　今回の芸術祭で、大きな課題になったのが、会場の南部地域には、トイレや食事を提供する店舗が少ないということでしたが、市内のゴルフ場にもご協力いただき、レストランを開放していただきました。日本有数のゴルフ場立地都市という強みを生かした取り組みですが、おかげで地域の観光資源を改めて見直すことができました。

大西　会場となったそれぞれの島の活性化効果も大きなものがありました。例えば、かつて大規模な産業廃棄物の不法投棄があった豊島は、アートの力で負のイメージが払しょくされ、直島に次ぐ人気の島になりました。ハンセン病の療養所がある大島でも、療養者と来訪者との交流が生まれ、今後の島のあり方を考える契機と

なりました。過疎化が進んでいた定住人口170人の男木島においても、休校していた保育所、小・中学校などが再開し、これまでの移住者は約40人に上るなど、島に活気が出てきました。

継続開催のためには市民理解も不可欠

井上　それぞれの芸術祭を継続的に開催するためにも、財源の問題は避けて通れません。各都市では財源をどのように確保されたのか、お聞かせください。

牛越　市の一般財源として約6000万円を拠出したほか、各種補助金や交付金、鑑賞パスポート収入、企業協賛を中心とした寄付金、ふるさと納税などにより、全体として約2億4000万円を確保できました。ただ、初めての本格的な芸術祭ですから、全体のイメージが皆さんに伝わりにくく、市議会をはじめ市民への説明には本当に力を尽くしました。

小出　公費を投入するわけですから、市民の理解をどう得るか、という点には相当頭を悩ませました。実際に、北部地域にお住いの市民から、「なぜ南部地域で芸術祭を開くのか?」という意見が寄せられていましたからね。今回の芸術祭では、市民参加型の展示・運営にシフトチェンジすると同時に、予算を大幅に抑えましたが、その背景にはそうした問題もありました。

井上 繁
日本経済新聞社元論説委員

大西　基本的な枠組みとしては、県と高松市を中心とした公費負担、実行委員会の一翼を担う福武財団の事業費、入場料・パスポート収入からまかなっています。高松市の公費負担の額は約1億円で、過去3回にわたり、変化はありません。この枠組みの中で黒字を出し、次の回に繰り越すようにしています。

中野　実行委員会に対する補助金として約400万円、ほかに伐竹作業等委託料として約380万円を市から出していますが、それ以上の支援は行いません。後は、企業や個人による協賛金、民間団体によるロウソクの寄付などを基にしながら、自主的に運営しています。

　加えて、持続可能性という点では、運営に携わる関係者の高齢化も課題です。祭りが始まって20年が経過し、世代交代が必要になってくる中で、何を守り、新しいテイストをいかに盛り込んでいくか、不易と流行を見極めながら、考えていかなければいけない時期に入ってきました。

井上　屋外型芸術祭は、本日お集まりいただいた地域以外でも、さまざまな都市で開催されています。例えば昨年は、さいたま市の「さいたまトリエンナーレ2016」、茨城県北6市町による「KENPOKU ART 2016茨城県北芸術祭」、近江八幡市の「BIWAKOビエンナーレ2016」などが開かれました。今年も、札幌市の「札幌国際芸術祭」、西之表市のほか2町の「種子島宇宙芸術祭2017」、珠洲市の「奥能登国際芸術祭」がこれから開催されます。

　屋内で行う芸術祭は、ややもするとハード施設の整備に目が行きがちですが、屋外型芸術祭はソフトを中心に展開される特徴があります。また、開催地の地域性が色濃く出るという点も、屋外型なればこそです。本日のお話からも、屋外型芸術祭は文化振興だけでなく、地域振興を含め、大きな可能性を秘めていることがよく分かりました。

　今後も市民と協働しながら、地域活性化に向けて、芸術祭をさらに発展させていただくことを願っています。本日はありがとうございました。

（平成29年6月7日、全国都市会館にて開催）

本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。